メインシナリオ／サイド第２回
『滅びを望む者たち　第２話』個別リアクション

『民を護るということ』

　馬車の中で、マーガレット・ヘイルシャムは、レイザ・インダーと２人きりになった。
　彼女は随筆家であり、マテオ・テーペ回顧録執筆のためと称して取材をしているため、レイザと警備隊隊長バート・カスタルの関係についても、耳にしていた。
　彼女がナイトに同行し、ここを訪れた理由は取材だけではなく、レイザに聞いてみたいことがあったからだ。
　ただ……。
「なんだ、隣に来るか？」
　マーガレットの身体を眺めるかのような視線に気になり彼を見ていたら、くすっと笑みを浮かべ隣へと促してきた。
（噂通りの殿方ということでしょうか。……ただ、卑猥な印象ではありませんわね）
　心の中でため息をつきつつ、マーガレットは微笑みを浮かべた。
「ご遠慮いたします。貴方のお隣はもっと相応しい方のために空けておいてくださいませ」
　そう返したあと、彼の反応を待たずマーガレットは質問を投げかける。
「ところで、レイザ殿はカスタル卿のご友人だとか？」
「友人？　……ああ、傍からはそう見えるのか。バートは単なる学生時代の同輩だ」
　レイザからはそうなのか、それとも照れなどの感情を含んでの返答なのかは、マーガレットには計り兼ねた。
「そうですか……そのカスタル卿と先日お話しをしたのですが、カスタル卿は警備隊隊長である自分が、この地を離れるのは最後になると言っておられました。
　先に弟に会ったら伝言を伝えてくれ、と」
　だからなんだと言いだしそうな顔で、レイザはマーガレットを見ていた。
「箱船は段階的に送り出されるのでしょうが、治安悪化で箱船建造に悪影響が出ないか心配です。
　そうでなくとも最初の箱船に伯爵様と姫様が乗れば、その後結界の維持も難しくなりそうですよね……確か神殿長のナディア様も同期だとか……」
「それはそうだが、その辺りは考えても仕方がないんじゃないか？　俺達に何が出来るわけでもない」
　そうだろうかと。
　マーガレットは儚げな目をレイザに向けて、気品のある口調で言う。
「レイザ殿は伯爵様の縁者……話せぬことがあることも理解しておりますが、友が置き去りになることをよしとはされませんわよね」
「……確かに俺は、アシル・メイユール伯爵と親戚関係にあるが、親交は無いようなものだ。箱船計画についても、他の貴族と同程度の説明しか受けてはいない。
　最初は小さな探索船でも出して、陸地を発見してから全員で……となると思っていたが、情報通のアンタがそう言うのなら、段階的になんだろうな」
「いえ、皆様の言動からそのように感じただけで、実情については知り得る筈がございません」
　マーガレットの言葉に「そうか」と答えて、レイザは彼女から目を逸らして、外に目を向けた。
　窓の外の空、青の海へと。
「あれから、２年が経った。だが、この地は沈んだままだ。水の魔術師たちの負担も一向に減らない。地上に人が暮らせる大地が残っているのなら、その大地に人口が集中しているだろう。世界のどこかでは、大地を巡って戦争が起きているかもしれない」
　レイザは淡々とした口調で話す。
「この海の外へ出て、騎士や貴族が、自国の民を救うために、すべきことはなんだろうな？」
　その横顔から、感情は読み取れなかった。
「俺は自分が乗る順番を自身で決めることはできない。真っ先に戦力として乗せられて――ここに残った人々のために、侵略をしろと言われたらどうするか」
　騎士――軍人ならば、命令に従い剣を抜くのだろう。自国の民の為に。
「バートは騎士として、兄として誇れる役職に就けたんじゃないか？」
　レイザは外に目を向けたまま、マーガレットを見ようとしなかった。
　マーガレットが非礼な物言いに対しての謝罪をしようとしたその時。
「寮の方か！？」
　勢いよくドアを開け放ち、レイザは外に飛び出していった。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
マーガレット・ヘイルシャム